舞鶴市文化財調査報告第 53 集

京都府舞鶴市

女布遺跡第 6 次・田辺城跡第 32 次
発掘調査報告書

2023.3
舞鶴市

舞鶴市文化財調査報告第 53 集

京都府舞鶴市

女布遺跡第 6 次・田辺城跡第 32 次
発掘調査報告書

2023.3
舞鶴市

例　言

1. 本書は令和４年度に舞鶴市が実施した発掘調査（下表）の調査報告書である。

遺跡名	所在地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者
女布遺跡	舞鶴市字女布地内	ほ場整備	約 134㎡	2022 年 9 月 1 日～ 10 月 7 日	松﨑健太
田辺城跡	舞鶴市字南田辺地内	範囲確認	約 253㎡	2022 年 11 月 22 日～ 12 月 21 日	

2. 調査は舞鶴市が主体となり実施した。調査に係る経費は舞鶴市が負担し、国及び京都府の補助金の交付を受けた。
3. 調査に使用した座標は、国土地理院平面直角座標系（世界測地系）第Ⅵ系である。標高は T.P（東京湾平均海水面高）を使用した。
4. 本書に使用した土色の色調記録には、財団法人日本色彩研究所監修『新版標準　土色調』を使用した。
5. 本書で使用した方位は座標北である。
6. 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。
   溝：SD　掘立柱建物跡：SB
7. 現地調査は松﨑健太（舞鶴市文化振興課）が担当し、吉岡博之（舞鶴市郷土資料館）、松本達也（同課）の協力を得た。
8. 本書の執筆・編集は松﨑が行った。
9. 本書に掲載した現地写真、出土遺物写真は松﨑が撮影した。なお、女布遺跡の空撮写真は京都府文化財保護課から提供を受けた。
10. 本書に掲載した図面及び記録類、本調査の出土遺物は舞鶴市において保管している。
11. 女布遺跡の現地作業については、女布地区の方々に従事いただいた。田辺城跡の現地作業は（公社）舞鶴市シルバー人材センターから作業員の派遣を受けた。
12. 現地調査・整理報告を実施するにあたり、地権者の方々、女布自治会、女布ほ場整備委員会、舞鶴市土地開発公社、京都府教育庁指導部文化財保護課、（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センターをはじめ、多くの方々からご協力、ご指導を頂いた。記して感謝いたします。

目　次

女布遺跡第６次発掘調査
第１章　はじめに・・1
第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　これまでの調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第２章　調査経過・・4
第１節　調査経緯・経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第２節　調査区の設定・調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第３章　調査結果・・8
第１節　検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第２節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第４章　まとめ・・12

田辺城跡第 32 次発掘調査
第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第１節　田辺城の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第２節　これまでの調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

第２章　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第１節　調査経緯・経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第２節　調査地の現況・調査区の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第３章　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第１節　検出状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第４章　まとめ・・24

写真図版・・・27

写真図版目次

女布遺跡第 6 次発掘調査

図版 1　調査前状況、調査地遠景写真

図版 2　調査地遠景写真、A 区遺構検出状況、調査風景

図版 3　A 区完掘状況、A 区壁面

図版 4　B 区完掘状況、B 区壁面

図版 5　A 区埋設土器出土状況、A 区 SD1 完掘状況

図版 6　A 区 SD2 完掘状況、A 区 SB1 完掘状況、A 区 SB2 完掘状況

図版 7　出土遺物写真（外面）（内面）

田辺城跡第 32 次発掘調査

図版 8　調査前遠景、調査地遠景、調査区とコモ池川暗渠

図版 9　調査区とコモ池川、重機掘削状況、調査風景

図版 10 調査区全景、北区全景

図版 11 南区石垣と西舞鶴駅、北区北側中央断割

図版 12 北区北側中央断割、北区南側中央断割

図版 13 南区壁面、南区断割、南区断割 深掘り部分

女布遺跡・田辺城跡位置図

女布遺跡第６次発掘調査

第１章　はじめに

１．地理的環境

女布遺跡は京都府舞鶴市字女布に所在する。舞鶴市は京都府東北部に位置し、リアス式海岸が発達した若狭湾の西端に面している。市内中央には湾口から二股に分かれて東と西に深く湾入する舞鶴湾が形成され、湾の周囲には標高 200 m～ 300 mの急峻な山稜が海まで迫っている。舞鶴市は地勢的に、福井県境の大浦半島を中心とする大浦地区、舞鶴湾東側湾奥に形成された沖積平野を中心とする舞鶴東地区、舞鶴湾西側湾奥に形成された沖積平野を中心とする舞鶴西地区、市域西側の一級河川由良川下流域を中心とする加佐地区の大きく４つの地区に分かれている。

女布遺跡が位置する舞鶴西地区は、北流して舞鶴湾に注ぐ伊佐津川と高野川によって形成された沖積平野に広がっている。女布遺跡は平野部南から西方へ入り組んだ高野川の谷筋と、南へ延びる伊佐津川の谷筋の結節点に程近いなだらかな谷平野に立地している。

遺跡周辺は、舞鶴付近から中国山地へ北東から南西方向に貫く「舞鶴帯」と呼ばれる古生代・新生代の地質帯内に位置しており、女布遺跡周辺には古生代の海成層である泥岩や砂岩を中心とする地質構成がみられる。

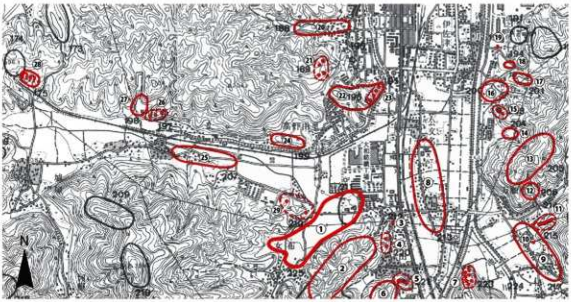
２．歴史的環境

女布遺跡では今回を含めて過去７次の発掘調査が実施されており、弥生時代から飛鳥・奈良時代、平安時代～中世を中心とする遺構が確認されている。遺跡範囲内の下森神社周辺の畑では、地元在住の森下一夫氏による表面採集の結果、縄文時代の石器や土器も少量採集されている。縄文時代にも一時期周辺に集落が存在した可能性があるが、調査において縄文時代の遺構は未確認である。以下、周辺の遺跡の状況を概観する。

縄文時代における舞鶴西地区の明確な遺跡は女布遺跡を除いて確認されていない。女布遺跡では、縄文時代草創期の有舌尖頭器１点をはじめ、少量の石器や土器が採集されているに過ぎず、実態は不明である。

弥生時代は、女布遺跡で弥生時代中期・後期の住居跡を確認している他、周辺では、⑭菖蒲谷口遺跡（◯番号は図１に対応）や⑯境谷南遺跡、⑫満願寺跡（隣接地）で弥生土器が採集されている。女布遺跡以外は舞鶴西地区東側の山裾にいずれも分布している特徴がある。なお、台状墓などの墳墓については、周辺では現在のところ未確認である。

高野川流域ではこれ以降の集落遺跡として、古墳時代から平安時代まで続く㉕高野由里遺跡や平安時代の㉗野村寺遺跡がある。城屋集落北側の山腹には、飛鳥・奈良時代の須恵器窯跡であ



①女布遺跡　②女布城跡　③大角遺跡　④正勝神社古墳群　⑤京田丸山古墳群　⑥京田城跡
⑦山崎古墳群　⑧七日市遺跡　⑨今田遺跡　⑩上殿古墳群　⑪万願寺古墳群　⑫満願寺跡
⑬万願寺城跡　⑭菖蒲谷口遺跡　⑮仁寿寺古墳群　⑯境谷南遺跡　⑰垣ノ内城跡　⑱切山遺跡
⑲切山古墳　⑳引土遺跡　㉑天狗岩古墳群　㉒引土城跡　㉓茶臼山古墳群　㉔高野由里城跡
㉕高野由里遺跡　㉖野村寺古墳群　㉗野村寺遺跡　㉘城屋窯跡群　㉙女布大日山古墳群

図１．女布遺跡周辺遺跡地図

る㉘城屋窯跡群がある。また、女布遺跡から東側の平野中央部には奈良時代の⑧七日市遺跡、舞鶴西地区中心部の高野川左岸の谷間には、古墳時代から平安時代の⑳引土遺跡がある。いずれも本格的な発掘調査例がなく、遺跡の実態はよく分かっていない。

古墳の分布については、女布遺跡に面した西側の丘陵に㉙女布大日山古墳群があり、女布遺跡の墓域の一つと考えられる。過去に剣と土器が出土したと伝わるが詳細は不明である。その他、㉗野村寺遺跡に隣接して㉖野村寺（マルコ山）古墳群、⑳引土遺跡の南側に㉑天狗岩古墳群、⑧七日市遺跡の周囲に㉓茶臼山古墳群、④正勝神社古墳群、⑤京田丸山古墳群、⑦山崎古墳群がある。また、舞鶴西地区平野東麓にも散発的にいくつかの古墳群がみられる。中でも⑲切山古墳は、古墳時代前期中葉の組合式石棺が確認されており、この地域における古墳時代前期の首長墳と考えられている。

律令期には、現在の市域は旧加佐郡の大半を占めており、熊野郡、竹野郡、丹波郡、与謝郡とともに丹後国に属していた。その中でも、女布遺跡の位置は田辺郷に属していたとみられる。

飛鳥・奈良時代については、周辺の遺跡数も増え、平野部の各所に集落が営まれたと考えられる。特に女布遺跡第３次調査で確認された倉庫を含む掘立柱建物群は注目される。柵列で区画し、主軸を揃えて整然と建物が建ち並ぶ状況は一般集落とは考えにくく、地方官衙関連遺構の可能性もある。女布遺跡が地域で中心的な位置を占めていたと想定される。

平安時代には、平野部西側山裾にある圓隆寺が創建されたと伝わり、重要文化財に指定されている平安時代定朝様の阿弥陀如来坐像・薬師如来坐像・釈迦如来坐像の３軀など、数体の平安仏

が伝わっている。その他、女布遺跡東側の丘陵を隔てた京田集落の善福寺にも平安時代の仏像が伝来するなど、平安期の寺院や地域信仰の様子が伺える。

鎌倉時代には、平野部東側の⑫満願寺が創建されている。寺域の一部で行われた発掘調査の結果、創建期に伴う建物跡や室町時代までの変遷が明らかになっている。

中世には各所に山城が築かれている。特に、女布遺跡東側の尾根上にある②女布城跡は舞鶴西地区でも最大級の規模である。近世の地誌類には、女布村の城主として森脇宗坡の名がみえ、細川家の『綿考輯録』には、天正 7 年（1579）に細川藤孝の攻撃によって一色家臣森脇宗坡が降参したと記されている。女布城の女布集落側に「城坂」などの小字も残ることから、女布集落と女布城が密接な関係にあったと考えられ、中世・安土桃山時代には一定規模の集落が女布地区にあったと想定される。

近世には、舞鶴西地区の平野中央に田辺城とその城下が形成される。女布地区も田辺藩の領地の中で、現在の女布集落に続く近世集落の姿が形成されたと考えられる。

3．これまでの調査

女布遺跡の過去の調査歴は下表のとおりである。

表.1　女布遺跡調査歴

調査次数	調査機関	期間	調査面積	検出遺構	出土遺物	報告書
1	舞鶴市	1989.2	約 155㎡	土坑（弥生中期）、竪穴式住居跡 5 基（古墳中期）、掘立柱建物跡 7 棟（古墳末～奈良）、溝	弥生土器、須恵器、土師器	市報告第 37 集
2		1997.8	約 155㎡	水路（弥生～古墳後期）、柱穴等	弥生土器、須恵器、土師器、木製品	
3		2001.5 ～ 8	約 1,500㎡	竪穴式住居跡 17 基（弥生中期～古墳）、掘立柱建物跡 8 棟（飛鳥・奈良）、柵列、土坑、溝等	弥生土器、須恵器、土師器、石器、玉関連遺物等	
4		2019.10~12	約 120㎡	柱穴、土坑、溝等	土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、木製品等	市報告第 52 集
5	京都府	2022.8~9	約 113㎡	柱穴、溝等	須恵器、土師器	府報告（令和 4 年度）
6	舞鶴市	2022.9~10	約 134㎡	掘立柱建物跡 2 棟、柱穴、溝	縄文土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、陶磁器等	市報告第 53 集
7	府理文センター	2022.9~2023.1	約 927㎡	（試掘調査）令和 5 年度整理報告		－

第２章　調査経過

１．調査経緯・経過

女布地区で計画されている府営圃場整備の範囲に女布遺跡が含まれていることから、令和元年度に舞鶴市において試掘調査を実施した（第４次調査）。その結果、一部の調査区で遺構を検出するなど、遺跡の範囲と内容が明らかとなった。しかしながら、圃場整備によって一部の範囲で遺跡の保存が困難な状況から、協議の結果、発掘調査を令和４年度に実施し、記録保存を行うこととなった。

調査は京都府文化財保護課及び（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、舞鶴市の３者で調査範囲を分担して実施した。それぞれ調査の着手順に、京都府文化財保護課調査を第５次調査、舞鶴市調査を第６次調査、（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター調査を第７次調査として調査次数を付与した。

舞鶴市調査は令和４年９月１日に現地調査に着手した。調査区の設定を行い、９月７日・８日に重機による掘削を行った。９月 12 日から作業員による人力掘削で遺構検出を開始し、順次遺構の掘削と記録作業を行った。10 月６日に重機によって埋め戻しを実施し、10 月７日に現地調査を終了した。

現地調査終了後、出土遺物の整理作業を実施した。同時に本報告書の編集作業を並行して行い、令和５年３月 24 日に本書を刊行して事業を終了した。

２．調査区の設定・調査方法

協議により令和４年度に舞鶴市の調査分担として割り当てられたのは、女布小字家下 678-4 の畑１区画である。

本地点は背後の丘陵斜面から北東方向に向かって傾斜する地形に位置しており、東側には谷筋が存在する。周辺では、第４次調査（試掘調査）において、本地点の下段の畑（T24）から中世の溝が検出されている。上段の畑にあたる T31 では遺構・遺物は確認されず、表土直下で地山を検出している。また、T25 では上流からの谷筋の堆積が顕著であり、こちらでも遺構は確認されていない。よって本地点のうち下段側（北側）でより遺構の検出が見込めると判断し、北側を中心に調査区を設置した（図２・３）。

なお、本地点の畑は中央付近で上下２段の小区画に分かれており、下段側をＡ区、下段から上段に向けてのトレンチをＢ区と便宜上呼称する。

調査は耕作土を重機で除去するとともに、遺構検出面まで慎重に重機で掘削し、人力掘削に切り替えて遺構検出、精査、遺構内掘削を行った。

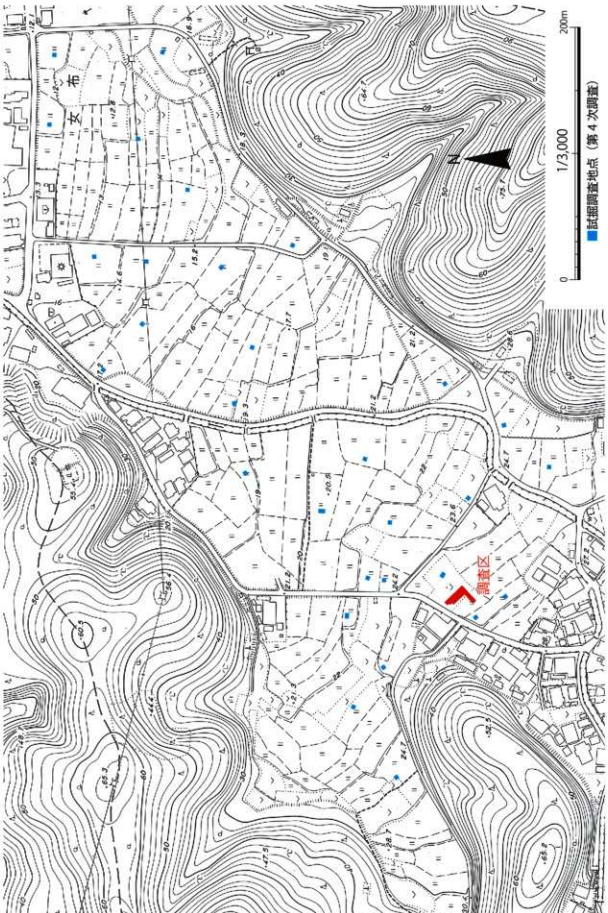


図２．調査区位置図

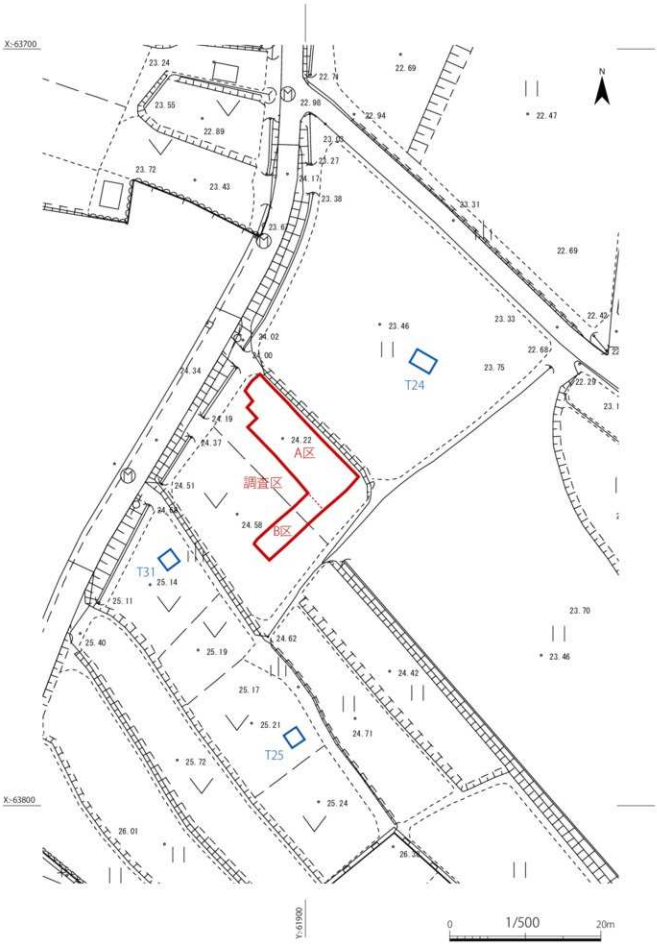
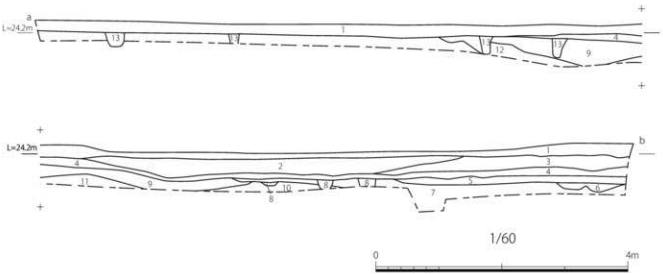


図3．調査区配置図

図４．検出遺構平面図



1: 表土（現耕作土） 2: 礫質土（やや緩い、シルトブロック混じる、近世瓦含む）【7.5YR4/4】
3: 礫混じり粘質土【10YR4/2】4: 粘質土（固く締まる、砂礫少量混じる、土器片含む）【10YR4/1】
5: 粘質土（遺物包含層）【10YR5/1】 6: 砂質土（SD2 埋土、緩い、砂礫少量混じる）【10YR4/1】
7: 砂礫混じり粘土（やや締まる）【10YR4/4】 8: 粘質土（遺構埋土、緩い）【2.5Y4/1】
9: 礫（固く締まる）【2.5YR5/8】10: 礫混じり砂質土（固く締まる）【10YR4/3】
11: 砂混じり粘土（固く締まる）【10YR5/3】 12: 礫（小礫、固く締まる）【10YR5/4】
13：粘質土（遺構埋土、緩い）【2.5Y3/2】

図５．Ａ区北東壁土層断面図

第３章　調査結果

１．検出状況

Ａ区

基本層序は、北西部を中心に耕作土直下の地山面が遺構検出面となっている。この範囲に遺物包含層は存在せず、すでに削平を受けている。一方、北東隅付近は状況が異なり、北東に向かって傾斜する地形を埋めるために盛土造成が行われていた（図５：土層２・３ ※以下土層図の土層番号と対応）。この造成土には近世瓦が含まれていたことから、近世以降の造成と考えられる。この造成土の直下には、旧表土と考えられる粘質土層（土層４）があり、これを除去した地山面で遺構を検出している。なお、北東隅付近は旧表土（土層４）の直下に中世の遺物を含む遺物包含層（土層５）が存在し、これを掘り下げた面でさらに遺構（SD1・SD2）を検出している。

Ａ区で検出した遺構は、埋設土器１、掘立柱建物跡２棟、溝２条と、その他の無数の柱穴である。柱穴からの出土遺物はほぼ皆無であり、一部には近世以降の耕作等に伴う新しい柱穴も確実に含まれているとみられる。

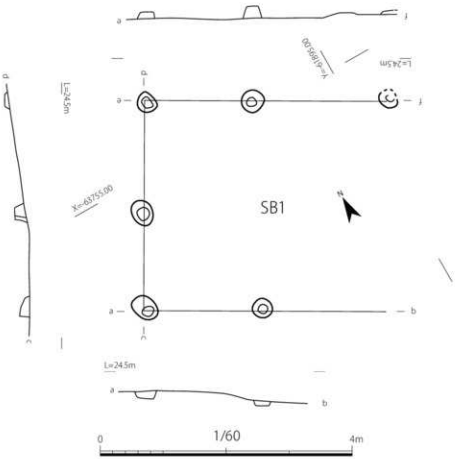


図６．掘立柱建物跡１図面

埋設土器

調査区南東壁付近で、耕作土下の造成土（土層３）を除去した面（土層４相当）から埋設土器を検出した（写真図版５）。土坑状の掘り込みに土師皿２枚があわせ口で埋納されており、土坑内および土坑上には石が置かれていた。石は建物礎石の可能性もある。土師皿の内部には多量の炭化物が詰まっており、地鎮等の何らかの祭祀目的の埋納と考えられる。

掘立柱建物跡１（SB1）

調査区南東側の地山面で南北方向約 3.3m、東西方向約 3.9m 以上（２間×２間以上）の掘立柱建物跡を検出した（図６）。柱間は約 1.7m ～ 2.1m である。柱穴内からの出土遺物は無いが、北東の柱穴は中世の遺物包含層（土層５）の除去後に検出しており、建物の時期としては中世頃と判断した。

掘立柱建物跡２(SB2)

調査区北西中央で表土直下の地山面から、梁行（東西）約 3.9m、桁行（南北）約 4.8m 以上（２間×３間以上）の掘立柱建物跡を検出した（図７）。柱間は梁行で約 1.9m ～２m、桁行で約 1.5m ～ 1.9m である。柱穴からはいずれも出土遺物は無く、時期は不明である。

溝１（SD1）

調査区北東隅部の遺物包含層（土層５）を除去後に、北西から南東方向に続く細い溝を検出し

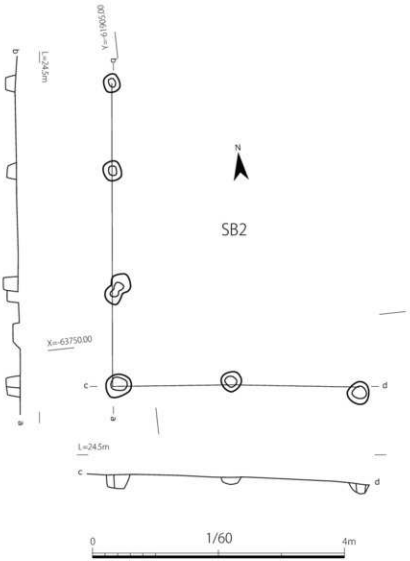


図７．掘立柱建物跡２図面

た（図８）。幅約 0.2 m、深さ約 0.1m を測る。出土遺物は無かった。切り合い関係から溝２よりも新しい。層序的に中世頃の遺構と考えられる。

溝２（SD2）

調査区北東隅部で、溝１に切られる南西から北西方向に続く溝を検出した(図８)。幅約 0.65m、深さ約 0.15m を測る。長さ約２m 分を確認したに過ぎないが、本調査の主な出土遺物はこの溝内及び上面の包含層から出土している。中世の遺物を主に含んでおり、近世遺物は認められないため、中世頃の溝と判断した。

B 区

B 区では A 区に近接して柱穴を１基検出したのみで、明確な遺構は確認できなかった。B 区の東壁を精査すると、旧水田層が確認できた。現在では調査区の畑から東側は１段下がって水田になっているが、以前は B 区付近も水田として利用されており、削平を受けているとみられる。

2．出土遺物

本調査で出土した遺物は整理コンテナ１箱分である。多くは土器の破片であり、報告資料として実測可能な遺物が少なかったため、一部は写真のみ掲載した（図９・写真図版７）。主な出土遺物の多くは、遺物包含層（土層５）及び溝２から出土した。

１～３は縄文土器である。１は重機掘削時の廃土より採集したもので、２・３は溝２から出土した。１は器壁６mm～８mmの深鉢体部で、外面は二枚貝による条痕調整、内面はナデ調整が施されている。後・晩期に比定されるか。

２・３は摩耗が激しく、施文や調整は判別できないが、非常に荒い胎土であり縄文土器片と判断した。

４～６は溝２から出土した。４は土師器の底部で、底部に回転糸切痕がある。５は内黒の黒色土器片である。６は瓦器椀片である。いずれも時期は中世である。

７は遺物包含層（土層５）から出土した。底部から口縁部に短く立ち上がる土師皿で、底部に回転糸切痕がある。時期は中世である。

８・９は青磁片である。遺物包含層（土層５）より出土した。

10は合わせ口で埋設された埋設土器の内、上部の土師皿である。時期は中世と思われる。

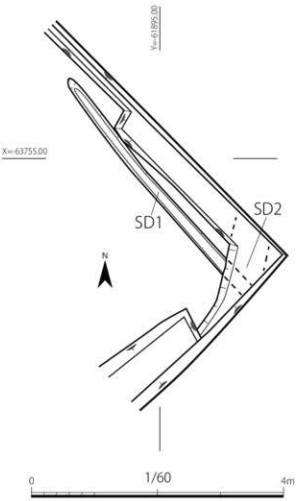


図８．SD1・SD2 平面図

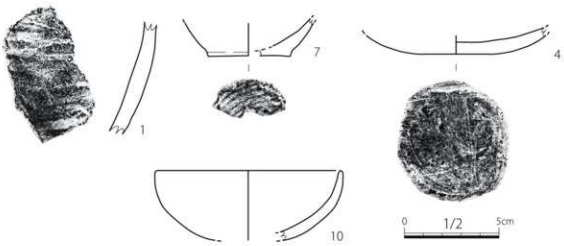


図９．出土遺物実測図

第４章　まとめ

女布遺跡では、女布谷の入口付近の下森神社周辺が従来から遺跡の範囲として知られており、弥生時代から古墳時代、飛鳥・奈良時代の遺構が確認されてきた（第１次～３次調査）。第４次調査で行われた試掘調査の結果では、下森神社周辺の微高地に加えて、女布谷中央部の帯状の微高地を中心に遺構・遺物の分布がみられ、広範囲に遺跡が広がっていることが確認された。

今回の地点は、この女布谷中央の帯状の微高地の付け根付近、丘陵に続くなだらかな傾斜地にあたり、微高地上に遺跡が広がっているこれまでの調査結果と一致する。

今回の調査では中世頃の溝２条の検出をはじめ、遺物包含層中にも中世の遺物が目立った。隣接する第４次調査の調査地点（T24）では、12 世紀中頃から 13 世紀初頭の遺物がまとまって出土した溝や、土坑を検出している。出土遺物の内容も共通していることから、本調査地点周辺の谷平野の奥部は特に中世頃から活発に土地利用がみられるようになったと考えられる。

また、遺構は確認できなかったが、縄文土器片や古代の須恵器片・土師器片も混入している状況から、周囲に当該時期の遺構がさらに広がっている可能性もある。

図 10　今回の調査地点と過去の調査地点

田辺城跡第 32 次発掘調査

第１章　はじめに

１．田辺城の位置と歴史的環境

田辺城は京都府舞鶴市に所在した近世城郭で、舞鶴西地区の沖積平野に位置している。城域は南北約 950m、東西約 500 mの範囲に及び、北側には海、東側には伊佐津川、西側には高野川、南側には低湿地が広がる要害地に立地している。城は本丸を中心に二ノ丸、三ノ丸が配され、これらを堀で囲う輪郭式平城である。

田辺城の築城契機は、天正６（1578）年の織田信長の丹後攻略に遡る。細川藤孝、明智光秀らは織田信長から丹後国平定の命を受け、翌年、建部山城（舞鶴市）から中山城（同）に逃れた丹後守護一色義道を自刃させた。

天正７（1579）年、丹後国が平定されると細川藤孝は信長から丹後国主に命ぜられ、同８年に丹後国に入国した。入国した細川藤孝・忠興父子は、丹後統治の拠点として宮津城の築城に着手し、続いて藤孝の居城として田辺城の築城に着手した。天正 10（1582）年、藤孝は本能寺の変で信長が自害すると剃髪して幽斎玄旨と号し、丹後国を忠興に譲るとともに、程なく田辺城を隠居城としたとされている。田辺城は天正 19（1591）年頃には完成したとみられているが、完成時期を示した明確な史料はない。

慶長５（1600）年、忠興が徳川家康の会津討伐に加勢するため出陣し留守中、丹後国は大坂方軍勢（西軍）に攻められた。これに対し幽斎（藤孝）は宮津城等を焼き払い、わずかな手勢を田辺城に集めて防戦した。各地で展開された関ケ原合戦の前哨戦の一つに数えられる「田辺籠城」と呼ばれるこの戦いは52日間に及び、後陽成天皇の勅使の派遣によって開城され、終結に至った。細川氏は関ケ原合戦で東軍の勝利に貢献し、軍功により拝領した豊前国に移転した。

代わって丹後国は信濃飯田の京極高知が拝領し、慶長６（1601）年に入国した。宮津城が先の籠城戦に際して焼き払われており、高知は田辺城へ入城したとされている。高知は手狭だった田辺城の拡張を行い、城の東側、南側に三ノ丸を設けて家臣団を居住させた。

元和８（1622）年、高知の死に伴い、遺言により丹後国は３人の子に分与され、嫡子高広が宮津藩（78,175 石）、庶子高三が田辺藩（35,000 石）、養子高道が峰山藩（10,000 石）として受け継いだ。高三は田辺藩初代藩主となり、３代にわたって統治した。

寛文８（1668）年、田辺藩主の京極高盛が但馬国豊岡へ国替えとなった。代わって京都所司代を 15 年務めた牧野親成が藩主となり、以降廃藩まで牧野氏が藩主を務めた。明治２（1869）年に田辺藩から舞鶴藩へ改称し、同４年に廃藩置県を迎えた。

明治６（1873）年の廃城後、田辺城は取り壊しとなり、現在では大部分が市街地化されたが、舞鶴公園内の石垣や庭園等、一部が現存するほか、現在の市街地の中に地割として城跡の痕跡を

比較的よく留めている。

2．これまでの調査

田辺城跡では、本調査を含めこれまでに 32 次を数える発掘調査が実施されており（図 1）、本丸天守台跡や堀跡、武家屋敷跡、土塁跡や道路跡等をはじめ、部分的にその様相が明らかとなっている。調査一覧については表 2 のとおりである。

これまでの調査では、本丸天守台や本丸内井戸跡の調査において、細川期の石垣、遺構を確認しているが、田辺城築城当初の縄張りや、建物跡等の遺構の確認には至っておらず、細川期の具体的な田辺城の様相については不明である。

他方、過去の調査では、京極氏によって拡張整備された三ノ丸の武家屋敷跡をはじめ、二ノ丸武家屋敷跡や御殿跡、堀跡等の京極期・牧野期を通じた城内の様相が部分的に明らかになっている。

表 1．田辺城関連年表

年号		西暦	主なできごと
天正	4 年	1576	織田信長、安土城を築城する。
	6~7 年	1578~79	信長丹後攻略を命じ、細川藤孝・明智光秀両軍で丹後守護一色氏を攻め、中山城の合戦で一色義道討死する。丹後国平定。
	8 年	1580	8 月、細川藤孝が信長から丹後国主に命じられ入国、宮津八幡山城に入り、光秀の協力を得て宮津城の築城を開始する。
	9 年	1581	宮津城完成（12 月ごろ）。丹後国天正検実施（110,700 石）。このころ田辺城の築城にとりかかる。
	10 年	1582	6 月、本能寺の変で信長自害。藤孝剃髪して幽斎玄旨と号し、丹後国を忠興に譲る。
	11 年	1583	8 月、河辺宮において能会が催される。
	13~14 年	1585~86	豊臣秀吉、関白太政大臣になる。
	16 年	1588	11 月、田辺新殿において能会が催される。
	19 年	1591	このころまでに田辺城完成か。
	20 年	1592	朝鮮出兵（文禄の役）忠興参戦。
慶長	2 年	1597	朝鮮出兵（慶長の役）。
	3 年	1598	8 月、秀吉病死。
	5 年	1600	6 月 27 日、忠興が徳川家康の会津征伐に加勢し出国する。
			7 月 21 日、福知山城主小野木縫殿介ら 1 万 5 千の兵が田辺城を包囲、田辺籠城戦おこる。これに先立ち、幽斎は宮津城・峰山城・久美浜城の城を自焼させる。同月 29 日、幽斎「古今伝授」をおこなう。
			9 月 12 日、勅使が来着、両軍和議成立。田辺城開城。同月 15 日、関ヶ原合戦。忠興、東軍で参戦し戦功をあげる。
			11 月、忠興軍功により豊前国を拝領。丹後国は京極高知が拝領する。
	6 年	1601	3 月、信州飯田から京極高知入国。田辺城に入る。
			田辺城改修普請にとりかかる。三ノ丸が拡張される。
	7 年	1602	7～9 月、高知慶長検地実施（123,175 石）。
	8 年	1603	家康、江戸幕府を開く。
	19 年	1614	11 月、大阪の役冬の陣に参戦。
	20 年	1615	5 月、大阪の役夏の陣に参戦。

元和	6 年	1620	12 月、田辺城火災
	8 年	1622	高知病死、遺言により丹後国は 3 人の子に分与させる。宮津、田辺、峰山の各藩成立。田辺藩（35,000 石）は高三が受け継ぐ。
	9 年	1623	田辺籠城戦の際に自焼した宮津城の再構築始まる。嫡子の高広が田辺城の諸門・櫓等を宮津城に移設したため田辺城は荒廃する。
寛永	2 年	1625	宮津城再構築ほぼ完了。高広、田辺城より同城に入る。（宮津越え）
慶安	3 年	1650	洪水、田辺で城および町中に浸水。
明暦	2 年	1656	高三の子、高直が田辺城の再建を幕府に願い出、宮津城の高広と争論になる。（幕府は和議を命じ、高直の田辺領有を承認する。）
寛文	8 年	1668	5 月、高直の子、高盛が但馬国豊岡に国替えとなる。代って京都所司代を 15 年間勤めた牧野親成（譜代大名）が藩主となる。
	9 年	1669	6 月、親成入部、このとき田辺城は「矢倉、門、高塀一ヶ所もなし石垣所々崩れ三ノ丸向こうの石垣東ノ方南ノ方三四カ所　七八間程宛崩有之」といった状態であったため、幕府に普請願いを提出、許可される。
	10 年	1670	2 月、田辺城の城門、櫓、石垣、高塀等の再建はじまる。6 月、再建工事は概ね終了する。
延宝	9 年	1681	本丸、二ノ丸石垣及び土塀崩壊のため修復。
元禄	5 年	1692	三ノ丸石垣、土塀修復。
	11 年	1698	田辺城堀普請。
	15 年	1702	田辺城堀普請始まる。
宝永	2 年	1705	田辺城堀普請。
享保	12 年	1727	9 月、田辺城下町から大火災発生。城の大手門、櫓、三ノ丸侍屋敷類焼する。
	15 年	1728	類焼した建物を再建。
天明	年間	1781~88	城内に藩校舎「明倫斎」開校。安政 4 年、野田笛浦によって勤善寮（高等学問所）と蔵修寮（学問所奉行と係員詰所）が設けられる。
	6 年	1794	城内三ノ丸近所出火。
文化	13 年	1816	田辺城水道普請行われる。
天保	10 年	1839	城内出火。大手門よりの長屋などを焼失。
文久	年間	1861~64	「明倫斎」を「明倫館」と改称する。
慶応	3 年	1867	5 月、イギリス船が田辺に入港する。10 月、徳川慶喜が朝廷に大政奉還する。
明治	元年	1868	鳥羽・伏見の戦（戊辰戦争）、江戸開城、東京に改称。
	2 年	1869	6 月、版籍奉還、田辺藩を舞鶴藩と改称。牧野弼代（10 代）舞鶴藩知事になる。
	4 年	1871	7 月、廃藩置県、舞鶴藩は舞鶴県に、次いで豊岡県に合併。明治 9 年に京都府に編入される。
	6 年	1873	田辺城の廃城が決定。
	7 年	1874	田辺城の取り壊し始まる。官有地として払い下げ、城内の開発が始まる。
平成	4 年	1988	田辺城資料館開館。

※この略年表は『舞鶴市史　年表編』を参考にして作成した。

※元亀 4 年から元和元年まで細川氏は長岡姓を名乗るが、一般的に知られる細川姓を本書では使用する。

表 2. 田辺城跡調査歴

調査次数	調査地点								調査面積	調査年月	調査概要	調査主体	報告書
	本丸	本丸堀	二ノ丸	二ノ丸堀	三ノ丸	三ノ丸堀	隣接地	その他					
1次		○	○	○					約630㎡	1981.6～9	本丸堀石垣、二ノ丸堀石垣、二ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	舞鶴市第11集
2次			○	○				隅櫓	約700㎡	1982.6～7	二ノ丸堀石垣、隅櫓石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第11集
3次							○		約200㎡	1983.7	三ノ丸堀隣接地を調査 水田を検出	府埋文センター	府概報第10冊
4次							○		約400㎡	1983.8～9	三ノ丸堀隣接地を調査	府埋文センター	府概報第10冊
5次							○		約10㎡	1983.7	三ノ丸堀隣接地を調査	舞鶴市	—
6次							○		約30㎡	1984.1	三ノ丸堀隣接地を調査 水田を検出	府埋文センター	府概報第13冊
7次				○					約10㎡	1984.1	二ノ丸堀石垣を検出	舞鶴市	—
8次			○	○					約500㎡	1984.11～12	二ノ丸堀石垣、二ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	—
9次							○		約30㎡	1986.1	二ノ丸堀隣接地を調査	府埋文センター	府概報第23冊
10次				○					約50㎡	1987.2	二ノ丸堀石垣を検出	舞鶴市	—
11次			○	○					約35㎡	1989.1～2	二ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	舞鶴市第16集
12次				○					約15㎡	1989.1	二ノ丸堀石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第16集
13次	○	○							約300㎡	1990	本丸堀、石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市史通史編（上）
14次	○	○						天守台	約200㎡	1991	天守台石垣（天正期）を検出	舞鶴市	舞鶴市史通史編（上）
15次			○	○				枡形部	約600㎡	1992.8～1	二ノ丸堀石垣、枡形部石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第22集
16次						○			約300㎡	1993.10～1994.1	三ノ丸屋敷地（京極期、牧野期）を検出	舞鶴市	舞鶴市第27集
17次			○	○					約300㎡	1994.5～7	二ノ丸堀、石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第28集
18次						○			約600㎡		三ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	—
19次								外曲輪	約150㎡		土塁を検出	舞鶴市	—
20次						○			約60㎡		三ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	—
21次						○			約160㎡	2000.2～4	三ノ丸屋敷地（京極期、牧野期）を検出 池跡を確認	舞鶴市	舞鶴市第35集
22次		○							約25㎡	2000.10～11	本丸堀石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第35集
23次						○			約125㎡	2002.8～10	三ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	舞鶴市第39集
24次						○		大内門付近	約60㎡		**整地層を確認**	舞鶴市	—
25次						○	○	御水道	約545㎡	2004.10～2005.1	三ノ丸堀、土塁、道路跡、屋敷地を検出 上水道施設「御水道」の石組溝を検出	舞鶴市	舞鶴市第42集
26次						○			約600㎡	2005.9～12	三ノ丸屋敷地、道路跡を検出	府埋文センター	府概報第119冊
27次						○	○	御水道	約150㎡	2008.4～5	三ノ丸南端外堀の土塁、上水道施設「御水道」の石組溝を検出	舞鶴市	舞鶴市第45集
28次	○							本丸内井戸	約25㎡	2010.9～10	本丸内井戸跡を検出	舞鶴市	舞鶴市第48集
29次				○					約25㎡	2012.5～6	二ノ丸堀石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第49集
30次			○					御殿（牧野期）	約290㎡	2012.9～12	築城当初を含む4時期の遺構面を検出 京極期、牧野期の屋敷地を検出	舞鶴市	舞鶴市第49集
31次	○	○							約400㎡	2018.8～9	本丸南端の石垣・堀を検出 一部石垣は築城当初の可能性	舞鶴市	舞鶴市第51集
32次						○			約253㎡	2022.11～12	三ノ丸南端の外堀跡、土塁跡を検出	舞鶴市	舞鶴市第53集

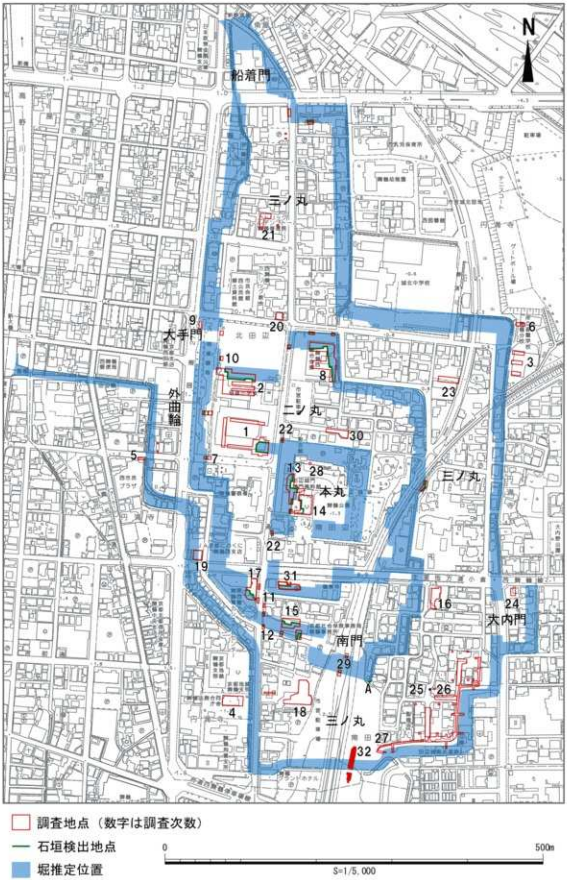


図１．田辺城跡と調査地点

第２章　調査経過

１．調査経緯・経過

舞鶴市土地開発公社が所有するJR西舞鶴駅東口の未利用地について、今後の開発計画に先立って敷地内の埋蔵文化財に係る試掘調査の要請があり、令和４年度に文化振興課において試掘調査を事業化するに至った。

今回の調査では、未利用地内に広がる田辺城跡の外堀の位置を確認し、埋蔵文化財包蔵地の範囲を明確にすること、また城内側の土塁等の遺構深度や内容確認を目的とした。

調査は令和４年11月22日に現地調査に着手した。調査区を設定した後、11月28日～30日にかけて重機による掘削を実施した。12月１日からは人力掘削によって遺構の確認、土塁跡や堀内の断ち割り断面の精査を行った。適宜記録作業を行った後、12月14日・15日に重機による埋め戻し作業を行い、12月21日に現地調査を終了した。

現地調査終了後、整理作業を実施した。同時に本報告書の編集作業を並行して行い、令和５年

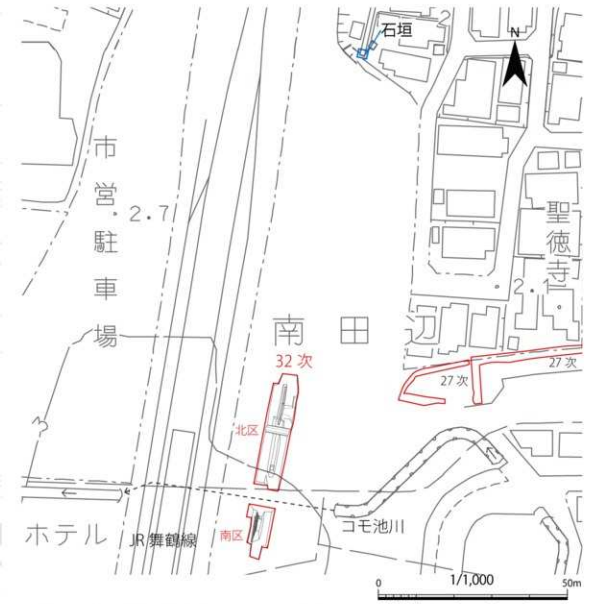


図２．調査区配置図

3月24日に本書を刊行して事業を終了した。

2．調査地の現況・調査区の設定

今回の調査地は、ＪＲ西舞鶴駅に隣接する敷地で、元々は旧日本国有鉄道（以下、国鉄と略する）の鉄道敷地として利用されていた。現敷地は標高約３ｍで、隣接する現在の道路面から約0.6m高くなっているが、これは鉄道敷地に伴う造成によるもので、旧状を留めていない。

敷地中央に東から屈曲して流れ込むコモ池川は、田辺城三ノ丸外堀の名残とされ、敷地内でコンクリート製のアーチ型暗渠に接続し、ＪＲ線を超えて西へ流れ、三ノ丸通りで北流し、高野川へ通じている。

コモ池川が敷地内へ流入する付近から東側にかけては、近年の宅地開発が行われるまでは外堀の痕跡の窪地と、外堀に附属する土塁の形状がよく残っていることが知られ、宅地開発に先立って第25～27次調査が実施されている。

今回の調査では、隣接する第27次調査で確認された外堀跡・土塁跡等の延長を確認することに主眼を置き、コモ池川が外堀内を流れていると仮定して、暗渠の北側及び南側に調査区を設定した（図２）。それぞれ北区・南区と便宜上呼称する。

なお、今回の調査期間中に当該敷地内の地表面の現状確認を行ったところ、石垣が露出している地点があることが判明した。今後の敷地開発時に注意を要する重要遺構であるため、別項を設けてあわせて記載した。

第３章　調査結果

1．検出状況

北区

北区はコモ池川の暗渠北側に設定した調査区である。

表土とその直下は石炭ガラによって分厚く造成されていた（図４土層１・２※以下土層図の土層番号と対応）。表土には鉄道軌道敷に用いるバラストが含まれる。石炭ガラの造成土を除去中に北区中央付近で東西方向に続くコンクリート構造物を検出した。国鉄時代の暗渠水路と思われるが詳細は不明である。コンクリート構造物の周囲は、コンクリートの打設のためか、大きく攪乱を受けていた。

コンクリート構造物北側では石炭ガラ（土層２）の下層に盛土の高まりを確認したため、土塁の可能性も考慮してそれ以上重機掘削を行わず、中央に断ち割りを設けて遺構の精査を行った。その結果、土層７や８にコンクリートが含まれていた他、土層13にゴムボールが確認され、土塁状の高まりの大部分が現代の新しい造成であることが判明した。しかし、最下層で確認した粘土層（土層19）は、田辺城跡の発掘調査で普遍的に見られる築城以前の厚い粘土の基盤層であり、この上位数層（土層14～17）には現代ゴミ等の混入は無く、比較的緻密な堆積状況であったため、土塁の構築土層であると判断した。

土塁構築土の城内側には、溝状の落込みが確認できた（土層12・13）。また、この付近に花崗岩の石材が１石存在した。隣接地の調査状況からは、土塁の城内側に石組溝が設けられており、この石材は石組溝の痕跡である可能性がある。土層12・13は現代遺物を含んでおり、攪乱された溝状の堆積ではあるものの、廃城後に石組溝の位置を踏襲して何らかの溝としてしばらく機能したことを示していると考えられる。

石材からさらに城内側（北側）には、砂利層及びシルト層による整地層が確認できた（土層

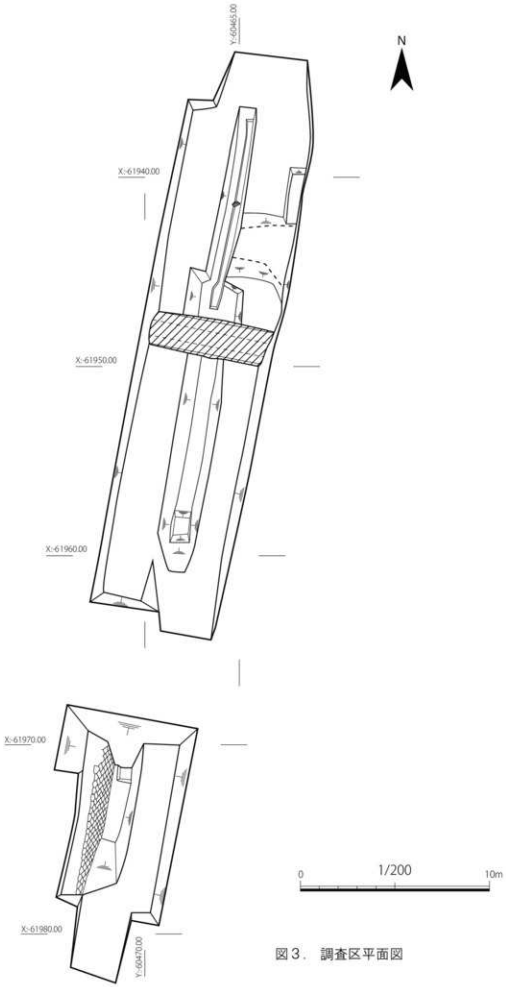
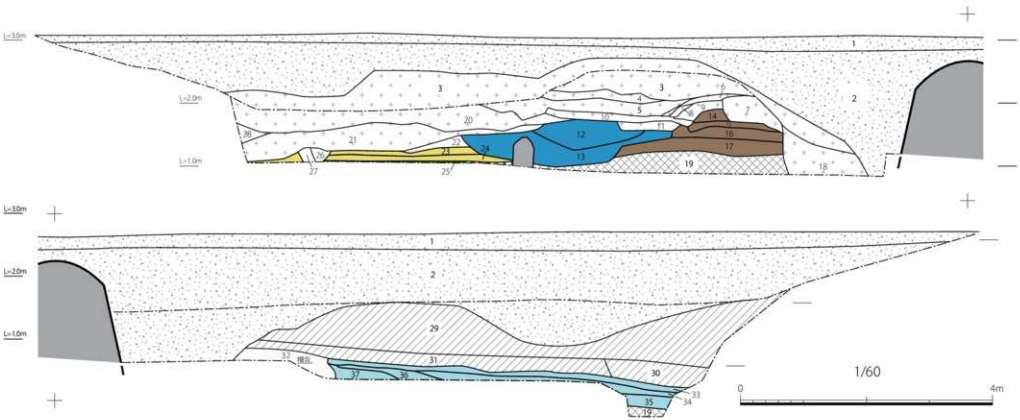

Y-60465.00
N
X-61940.00
X-61950.00
X-61960.00
X-61970.00
X-61980.00
Y-60470.00
0
1/200
10m

図３．調査区平面図



1: 表土（バラスト・石炭ガラ含む） 2: 石炭ガラ 3: 礫混じり砂質土（均一な造成土、緩い）【10YR4/2】 4: 粘質土（緩い、石炭ガラ含む）【7.5YR4/1】 5: 粘質土（不均一）【7.5YR5/4】
6: 礫混じり砂質土（石炭ガラ少量含む）【10YR4/2】 7: 砂質土（コンクリ片含む、緩い）【10YR3/2】 8: コンクリート 9: 礫混じり砂質土（固く締まる）【10YR4/3】
10: 礫混じり粘質土（石炭ガラ少量含む、やや締まった）【10Y4/1】 11: 礫質土【10YR4/1】 12: 礫混じり粘質土（礫多い、緩い）【N3/0】
13: 礫・砂混じり粘質土（礫多い、緩い、現代ゴミ含む）【5GY5/1】 14: 礫混じりシルト（固い）【10YR6/4】 15: 粘土（やや締まった）【2.5GY5/1】 16: シルト（やや緩い）【5B5/1】
17: シルト（少量の円礫含む、固く締まった）【5B4/1】 18: 砂礫（緩い） 19: シルト（固く締まった、円礫少量含む）【7.5Y3/1】＊ベース層 20: 砂礫混じり粘質土（均一で締まった）【2.5Y6/2】
21: 砂混じり粘質土（緩い）【10G4/1】 22: 礫混じり粘質土【10Y5/1】 23: 砂利（道か）【2.5Y4/1】 24: 砂利混じりシルト【2.5Y4/1】
25: 有機質土層（稲藁片等植物片多量に含む、築城以前の水田層か）【10YR4/2】 26: 撹乱掘込 27: 撹乱掘込 28: 石炭ガラ
29: 礫混じり粘質土（造成土）【10YR5/4】 30: 石炭ガラ 31: 礫混じり粘質土（造成土か）【10BG5/1】 32: 撹乱【5Y4/2】 33: 堀埋土・粘質土（緩い）【5B5/1】
34: 堀埋土・シルト（鉄道関係遺物含む）【10YR3/2】 35: 堀埋土・砂混じり粘土（緩い）【7.5Y4/1】 ※中央断割と調査区東壁の見通し合成図

図 4．北区土層断面図

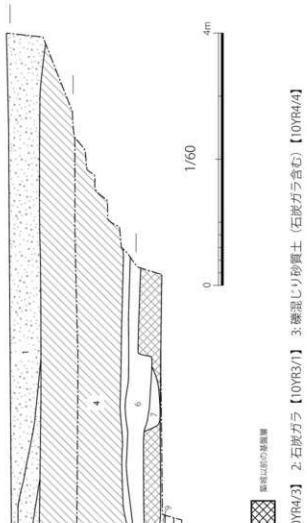


図5．南区土層断面図

23・24)。また、この下層には多量に有機物を含む旧水田層と思われる土層（土層25）があり、京極氏による三ノ丸の拡張に伴って、水田を埋めて整地した状況を示していると推測した。砂利による整地は、城内の道である可能性がある。

コンクリート構造物から南側についても中央に断ち割りを設けて土層の精査を行った。こちら側では明らかに土塁構築土と判断できる土層は確認できず、攪乱によって土塁の大半はすでに失われていることが判明した。なお、堀内の堆積土がみられたため、この付近は三ノ丸外堀内にあたることを確認した。

堀埋土の内、土層 34 には鉄道関連遺物として、駅構内で販売されていた「鉄道局指定」銘入りの茶瓶が含まれていた（写真１）。このため、明治 37 年に鉄道が開通してしばらくの間は外堀の名残を留め、現代ゴミが堆積するような状況であったと推測される。基盤の粘土層（土層 19）を標高約 0.4m で確認したが、この付近が堀底と思われる。なお、現在のコモ池川の水面高は標高 0.8m 付近である。

堀埋土の上層は、石炭ガラを含む造成土で一気に造成された様子が伺えた。鉄道敷地に関連し、外堀を埋め立てたものと考えられる。

南区

南区はコモ池川の暗渠南側に設定した調査区である。掘削を進めると、こちら側でも石炭ガラの造成土がみられたが、堀側（北側）に向かって傾斜するような堆積を示し、北側に向かって堀を埋め立てた状況が見て取れた。しかし、下層には北区で見られたような堀埋土が確認できなかったことから、南区には堀の範囲が及んでいないと判断した。即ち、外堀の城外側境は、北区で検出した堀埋土の南端と南区の間に納まると推測される。

南区西側には南北方向に花崗岩の新しい石垣が検出された。国鉄時代の鉄道関連の石垣と思われる。石垣が機能していた当時は、鉄道敷と石垣の下（東側）で大きな高低差が生じており、鉄道敷地の拡大のために、石垣以東を大きく埋め立てて現敷地が形成されたとみられる。

土層５（図５※以下土層図の土層番号と対応）の粘質土層は、この造成以前の表土にあたるが、北区同様の駅構内で販売されていた茶瓶が含まれていた（写真１）。その下層（土層６）の粘土層には現代遺物は含まれず、廃城以前の土層であると判断した。城外には水田等が広がっていたと推測していたが、耕作土とも異なる粘土堆積であり、低湿な周辺環境を物語っていると考えられる。その下層（土層８）は北区でも確認された基盤層の厚い粘土堆積である。

なお、一部をさらに深掘りして基盤層より下層を確認したが、砂混じり粘土や砂の堆積が見られた。いずれも遺物は確認できなかった。また、木片等有機物が含まれていたが、貝殻は含まれておらず、海成堆積かどうかの判断はできなかった。

写真１．出土した茶瓶（左：北区、右：南区）

石垣露出地点

図２に示した地点で石垣の露出を確認した（写真２）。現在はコンクリート製側溝の壁として利用されている。この地点は第 29 次調査で確認された石垣の東側延長で、二ノ丸堀石垣（三ノ丸側岸）にあたる。天端のレベルは標高約 2.26m、石垣の現況高さは約 0.8m である。当該敷地の境界上にあり、敷地内には良好に石垣が保存されている可能性が高い。今後の敷地開発にあたり保存に関して注意を要する。

写真２．石垣露出地点（二ノ丸堀石垣）（北から）

第４章　まとめ

今回の調査では、遺構の残存状況が悪かったものの、三ノ丸外堀跡、土塁跡の一部、道跡の可能性がある城内側整地層を確認することができた。土塁の幅及び高さは検出状況からは不明である。また、土塁と堀の境界も攪乱によって確認できなかった。外堀の城外側境は、北区で検出した堀埋土の南端と南区の間に納まると推測されるが、コモ池川の暗渠付近がその境界になると考えられる。

今回の調査結果を考える上で、隣接地の調査が参考になる。写真３は第 25 次調査時の写真である。旧状が良く残っており、三ノ丸南東部のかつての状況が理解できる。外堀の名残の窪地や、奥側に今回の調査地方向（西側）に続く土塁の高まりが写っている。写真４・５は第 27 次調査時の写真である。写真４は、今回の調査地の方向に続いている石組溝（御水道）の検出状況である。奥側にコモ池川に沿って屈曲して西へ延びる土塁の痕跡が分かる。写真５はその屈曲（折れ部）部分の土塁断ち割り箇所の写真である。現状、コモ池川の改修に伴い、この土塁痕跡は消滅している。

今回の調査結果を踏まえ、隣接地の第 25 ～ 27 次調査の結果も総合して三ノ丸南東部の構造を整理すると、図６のようになる。三ノ丸外周を廻る素掘りの外堀は広いところで幅約 11m ～ 13m、城内側に幅約 5m ～ 8m 前後の土塁を設けている。土塁の高さは残存高で城外側から約 1.6m、城内側から約 0.6m 程度あったが、本来はもう少し高かったと考えられる。土塁の城内

写真３．第 25 次調査全景（東から）

写真４．第 27 次調査全景（東から）

写真５．第 27 次調査３トレンチ（東から）

側裾部には石組溝を廻らせている。この石組溝は「御水道」と呼ばれる城内に引き込まれた上水道跡であり、文化 13 年（1816）の田辺城水道普請で整備されたと考えられる。さらに、石組溝城内側に通路となる道を設け、内側に三ノ丸武家屋敷地が広がるという構造である。

この構造は絵図に描かれた三ノ丸南部の様子とも符合する（図７・８）。

今回の調査は、田辺城跡南端位置の推定に資する成果があった。今回の調査成果が今後の田辺城跡の実態解明の一助となれば幸いである。

（女布遺跡第６次調査参考文献）

松本達也 2002『女布遺跡第３次発掘調査概要報告書』（舞鶴市文化財調査報告第 37 集）舞鶴市教育委員会

松﨑健太 2020『女布遺跡第４次発掘調査報告書』（舞鶴市文化財調査報告第 52 集）舞鶴市

（田辺城跡第 32 次調査参考文献）

松本達也 2005『田辺城跡第 25 次発掘調査概要報告書』舞鶴市文化財調査報告第 42 集　舞鶴市教育委員会

田代　弘 2006「田辺城跡第 26 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 119 冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

松本達也 2009『田辺城跡第 27 次発掘調査報告書』舞鶴市文化財調査報告第 45 集　舞鶴市教育委員会

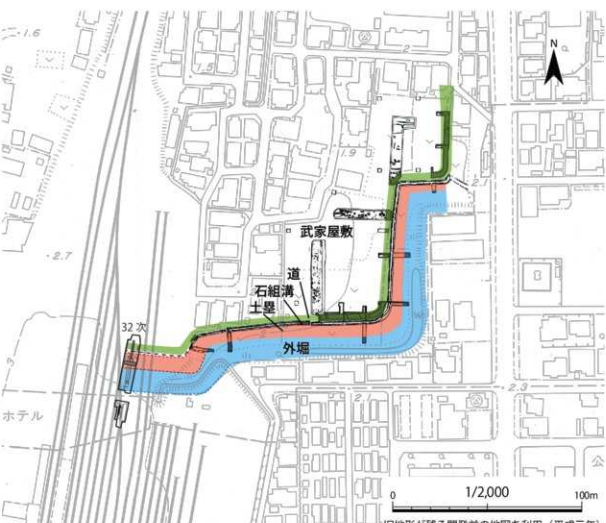


図６．三ノ丸南東外周部の構造（一部推定）

図７．「田辺城図」（延宝・元禄年間） □ 32 次調査区推定位置

図８．「田辺城西側石垣修覆伺図控」（元禄５年） □ 32 次調査区推定位置

写　真　図　版

図版１　　女布遺跡第６次調査

調査前状況
（北から）

調査地遠景
（南西から）

調査地遠景
（北から）

調査地遠景
（北東から）

A 区遺構検出状況
（南東から）

調査風景
（北から）

Ａ区完掘状況
（南東から）

Ａ区完掘状況
（北西から）

Ａ区壁面
（南西から）

Ｂ区完掘状況
（北西から）

Ｂ区完掘状況
（北東から）

Ｂ区壁面
（北西から）

A 区埋設土器出土状況
（北西から）

A 区埋設土器出土状況
（南西から）

A 区 SD1 完掘状況
（北西から）

A 区 SD2 完掘状況
（南西から）

A 区 SB1 完掘状況
（北西から）

A 区 SB2 完掘状況
（南から）

出土遺物写真（外面）

出土遺物写真（内面）

調査前遠景
（南から）

調査地遠景
（南西から）

調査区とコモ池川暗渠
（東から）

調査区とコモ池川
（南から）

重機掘削状況
（南から）

調査風景
（南西から）

調査区全景
（南から）

調査区全景
（北から）

北区全景
（南西から）

南区　石垣と西舞鶴駅
（北から）

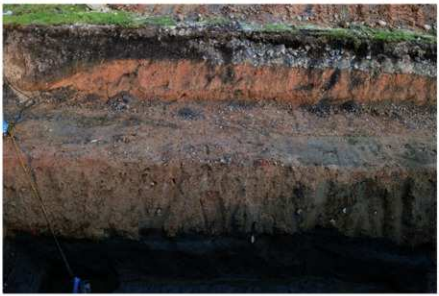
北区北側中央断割
（西から）

北区北側中央断割
土塁部分（西から）

北区北側中央断割
城内整地層部分（西から）

北区南側中央断割
（西から）

北区南側中央断割
深掘り部分（西から）



南区壁面
（西から）

南区断割
（西から）

南区断割 深掘り部分
（西から）

報告書抄録

ふりがな	にょういせきだい 4 じ・たなべじょうあとだい 32 じほっくつちょうさほうこくしょ
書名	女布遺跡第 6 次・田辺城跡第 32 次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
ｼﾘｰｽﾞ名	舞鶴市文化財調査報告
ｼﾘｰｽﾞ番号	第 53 集
編著者名	松﨑 健太
編集機関	舞鶴市
所在地	〒 625-8555　京都府舞鶴市字北吸 1044 番地
発行年月日	2023 年 3 月 24 日

ふりがな	ふりがな	コード						
遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
女布遺跡（にょういせき）	舞鶴市字女布（まいづるしあざにょう）	26202	211	35° 25′ 30.59″	135° 19′ 12.91″	2022. 9.1 ～ 10.7	約 132㎡	圃場整備
田辺城跡（たなべじょうあと）	舞鶴市字南田辺ほか（まいづるしあざみなみたなべほか）		164	35° 26′ 33″	135° 19′ 51″	2022. 11.22 ～ 12.21	約 253㎡	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
女布遺跡	集落	縄文 中世	掘立柱建物跡 2 棟、柱穴、溝跡等	縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、黒色土器	中世の溝跡等を確認した。
田辺城跡	平城	近世	堀跡、土塁跡	特になし	三ノ丸外堀跡・土塁跡の一部を確認した。

舞鶴市文化財調査報告第 53 集
女布遺跡第６次・田辺城跡第 32 次発掘調査報告書

刊行日　令和５年３月 24 日
発　行　舞鶴市
〒６２５－８５５５
京都府舞鶴市字北吸 1044 番地
印　刷　阿部印刷工業株式会社
〒 625-0036
京都府舞鶴市字浜 644 番地